新たな時代の到来

北海道新幹線開業は、更なる飛躍のチャンス。

青森県知事 三村 申吾（みむら しんご）

3月26日、北海道新幹線新青森・新函館北斗間が開業します。平成17年5月の着工以来10年余の歳月を経て、いよいよ新幹線が青函トンネルを通って津軽海峡を渡り、北の大地に到達します。北海道民の皆さん、特に道南地域の皆さんの期待はさぞかし大きいものと思います。と同時に、3度目となるこの開業は、本県にとっても非常に大きな意味を持つ開業です。

竜飛岬や大間町からは対岸の北海道が、天気の良い日にはその家々までもが手に取るように見えます。幅約20キロメートルの津軽海峡は昔から"しょっぱい川"と言われ、縄文の古より人々はこの川を渡って北海道との交易・交流を続けてきました。

また、青函地域は多極分散型国土形成を目指して昭和62年に策定された国の第四次全国総合開発計画に基づき、札幌圏と仙台圏の中間に位置する第三の極となるインターブロック交流圏に位置付けられてもいました。

しかし、青函連絡船で4時間、青函トンネルが開通しても2時間という時間距離は、本県と道南地域との一体的な交流経済圏域の形成にとって大きな障害となっていました。

それが今、北海道新幹線の開業により新青森・新函館北斗間が約1時間で結ばれ、両地域間での通勤や通院も可能となることで、経済的な交流拡大に加えて両地域に暮らす人々の内に精神的な一体感が醸成されていく新たな時代が到来したのです。

さらに、この地域には東京や仙台に直結する東北・北海道新幹線に加えて、三沢・青森・函館の3つの空港から東京や大阪、名古屋、札幌の大都市圏や諸外国との間に航空路線が開設され、函館港と青森港、大間港間ではフェリー航路が運航されています。

これらの広域交通網を活用すると、航空機を利用して訪れた人々が新幹線やフェリーを利用して本県と道南地域の間を気軽に移動することが可能となります。例えば、函館と弘前での洋館巡りや函館と八戸でのイカの食べ比べ、湯の川と浅虫での温泉巡りといった楽しい体験もできるようになります。道南地域は年間約1200万人、青森県には年間約3400万人の観光客が訪れています。双方の観光資源を効果的に組み合わせ魅力を高めることで、国内外から一層の誘客が可能となり、両地域全体の観光客数を単純な足し算を超えて大幅に拡大することができると思っています。

奥津軽いまべつ駅（今別町）［提供：鉄道・運輸機構］

さらには津軽海峡を挟んだ本県と道南地域が一緒になって農林水産資源を活用した商品などのブランド化を加速することで、全国にアピールできる名品づくりも可能でしょう。

コラムに記したとおり、津軽海峡圏域は壮大なる可能性を持つ、今ここから新しい時代が始まる地域であると確信しています。北海道新幹線の開業という更なる飛躍のチャンスを生かすべく、共に果敢にチャレンジしていきたいと思います。

歴史と文化の香る青森の魅力を、積極的にPRしていきたい。

【インタビュー】
青森県商工会議所連合会会長
若井 敬一郎（わかい けいいちろう）さん

青森県と道南地域は、古くは縄文時代から交流が盛んで、ひとつの文化圏をつくってきました。青森商工会議所は函館商工会議所と連携し、「会員事業所パートナーシップ支援事業」を行っており、青函の企業がビジネスパートナーとしての協力関係を築くことでいくつもの新商品が誕生しました。

また、函館市から始まった「バル街」は現在、青森市や弘前市をはじめ県内各地で行われており、地域の活性化はもちろん、若い人たちの出会いの場にもなっています。新幹線開業後は、青森・函館の各バル街をはしごすることも夢ではないので、海峡を越えて交流の輪が広がっていけば、いっそう盛り上がるのではないでしょうか。

現在、世界遺産登録を目指して取組を進めている「北海道・北東北の縄文遺跡群」も、開業を機にさらに青函連携を強めて推進していきたいと思います。今年7月から「青森県・函館DC」が実施されますが、津軽海峡圏は、陸・空・海の交通手段が多岐に渡り、非常にバラエティー豊かな旅が楽しめることを売りに、お互いの地域の魅力を最大限に生かした観光商品を作っていきたいと思っています。

本県の最大の魅力は、県内各地のねぶた・ねぷた、三社大祭などの祭りや津軽三味線などの郷土芸能、三内丸山遺跡や弘前城など、歴史と文化が香る場所であるということ。函館を訪れる国外観光客にも、本場の文化に触れることのできる強みを積極的にPRして集客につなげていきたいですね。

地元の魅力にはなかなか気付きにくいものですが、県民一人ひとりが、もっと胸を張って青森を自慢しても良いのではないでしょうか。青函それぞれの地域が地元を見つめ直し、一緒に魅力を発信していけたらと考えています。

芦野公園のさくらと津軽鉄道

青森市ベイエリア